

ニュースレター第39号をお届けいたします。今号は樋野先生とスタッフの新田が担当します。

『Union is Power』(協調・協力こそが力なり)

～ 『人生の眼を開く』 ～

樋野興夫 (順天堂大学名誉教授、新渡戸稲造記念センター長)



2026年3月14日『お茶の水 がん哲学外来・メディカルカフェ in OCC』に出席した。7人の個人面談もあり大変有意義な充実した貴重な時であった。『がん哲学外来カフェ』を地元で開設したい人もおられた。順天堂大学の大学院生も、出席され大変興味を持たれていた。長野県在住、シアトル在住の方も参加されていた。大いに感動した。

『お茶の水 がん哲学外来・メディカルカフェ in OCC』は、東日本大震災の2011年に創設準備がなされ、2012年に当時 OCC 副理事長であった榊原寛(1941-2020)先生が始められた。2011年3月11日14時46分18秒に最大震度7 マグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震が発生した。1933年3月3日は、三陸で地震の大災害があった。新渡戸稲造(1862-1933)は被災地 宮古市等沿岸部を視察したとのことである。その惨状を目の当たりにした新渡戸稲造は『Union is Power』(協調・協力こそが力なり)と当時の青年に語ったと言われている。新渡戸稲造没80周年記念講演会(2022年)が、『東日本大震災復興支援宮古講演会』として岩手県宮古市で開催され、私は『新渡戸稲造博士とがん哲学』のタイトルで、講演を依頼されたことが、今回鮮明に思い出された。

3月15日は、第9回日本Medical Village学会(滋賀県の能登川コミュニティセンターに於いて)に赴く。今回の大会長は【東近江市永源寺地域の保健・医療・福祉が一体となった地域包括ケアを行なわれている診療所長 花戸貴司先生】である。日本Medical Village学会の理事長を務めている筆者は、基調講演【『人生の眼を開く』～『言葉の処方箋』～】を依頼された。

次ページへ続く

前ページより続き

人類の進むべき方向は、『医療の共同体 = 1人の人間を癒すには、1つの村 = Medical Village が必要である』であろう。また、『がん哲学外来 ~ メディカルタウンを追い求めて ~』（2008年発行 to be出版）の『メディカルタウンのモデル・拠点』が『お茶の水メディカル・カフェ in OCC』でもあろう！『練られた品性と 綽々たる余裕』は『お茶の水メディカル・カフェ in OCCのスタッフの真髄』である。



今月も4名の初参加の方をお迎えして、OCCメディカル・カフェが開催されました。

樋野先生の本を読んで参加された方、ご家族に勧められた方…。「何をするんだろう？」「どんなところなんだろう？」と、最初は不安に思いながらのご参加です。そこにあるのは“空っぽの器”です。6~8人でテーブルを囲み、対話が始まります。ご自分のことを話すのも、聴くだけ参加も、お名前を名乗らないことも自由です。

がんと診断されて、「一番大きかったのは気持ちの問題だった」と仰った方がおられました。医師は検査結果、病気のこと、治療のことを説明してくれます。家族や友人は心配してくれて、慰め励ましてくれます。でも、それだけで埋められないこと…。

検査結果や病状説明には次から次へと決断を迫られ、「こんなことは初めてだから」と動揺して困惑する気持ち。家族には心配かけたくない気持ち。仕事はどうしよう？職場にはどう言おう？ 病気への不安もあるし、恐くて落ち込みもする。一方で、この困難を乗り越えようと勇気を振り絞る。

そんな気持ちのあれこれを“空っぽの器”にぶち込みます。何を入れても大丈夫。みんなで混ぜて、みんなで支えます。解決はされないかも知れないけれど、少し解消されるのです。病気に関する知識や情報ではなく、慰めや励ましでもなく、参加者同士の“対話”にそんな力があることが不思議です。でも確かにあるのです。



「がん哲学外来カフェが何をする場所なのか？」… “空っぽの器”を一言では説明することは難しいですが、ご参加くださるとその場でお分かりいただけると思います。どうぞまずは一度一緒にテーブルを囲みに来てください。スタッフ一同お越しをお待ちしております。

お茶の水がん哲学外来・メディカル・カフェ in OCC スタッフ 新田幸代

